

# 小集団における心理的援助技法としての造形表現活動

—不登校生徒・重複聴覚障害者に対するアプローチ—

齋藤 ユリ (大正大学大学院人間学研究科臨床心理学専攻博士課程)

村瀬 嘉代子

並木 桂

鈴木誠

(大正大学人間学研究科

大正大学カウンセリング研究所

東京都公立中学校教諭)

## <要 旨>

本研究では、不登校生徒・重複聴覚障害者を対象に小集団における心理的援助として造形表現活動を実践し、集団場面における造形表現活動の持つ特質、治療技法としての活用法について検討した。その結果、参加者が制作の場を「安心して過ごせる時間」と感じ、その要因はありのままの自分で居られ、制作の有無や作品の巧拙に関わらず、自分の表現が受け入れられる場であったことにある。作品制作により①自己を表出する契機、②表現することでのカタルシス効果、③自己を客観視し自己理解が進む、④参加者理解のためのアセスメントツールとなることが認められた。関わり方の留意点として、参加者がその場にいるだけで尊重されていると感じ、安心して表現のできる場を作ること、個々の参加者の状態に合わせた対応を心がける。援助者がその活動の意義や目的を考えつつ一方で参加者の状態に合わせ予定を柔軟に変更し、援助者自身がその活動を楽しむゆとりをもつことが必要である。他職種と連携し、参加者の平素の様子や活動での様子を協議することが参加者の援助につながった。

## <キーワード>

心理的援助としての造形表現活動 小集団 居場所 不登校 重複聴覚障害

### 【はじめに】

「心により所となる物理的空間や対人関係、もしくはありのままの自分で居られる時間と空間を包含するメタファーとしての『居場所』は心理的治療と成長にとり基本的に必要である」村瀬ら(2000)。重篤な状態にあるクライアントにとっては、この「居場所」感覚を贈り、それを元にクライアントのニーズに即応した心理的援助をすすめることが効果的である。

他方、適切に運営される出入り自由な小集団はこの「居場所」感覚をもたらすものであること、並びに言語的表現が不十分な人にとっては、造形表現活動が感情や思考の統合を促進すること、またその場合、造形表現内容やプロセスがアセスメントツールとして有意味であること、心理的援助活動を行う上での他職種の人々

とコラボレートする際に有用なツールとなることについて実践を通して気づきその要因について検討してきた。本研究においては不登校生徒・重複聴覚障害者に対する実践を通し、集団場面における造形表現活動の持つ特質を検討し、治療技法としての活用法を明らかにしたい。

## Ⅱ. 研究1. 「不登校生徒に対する心理的援助技法としての造形表現活動」

### 1. 問題と目的

不登校の対策の一つとして文部科学省(2003)は「入所・通所型の施設の取り組み」を重視し、適応指導教室の整備充実を図ることとしている。この適応指導教室の前身として通級

指導学級（不登校生徒を対象とする情緒障害学級）がある。これらは、不登校生徒に居場所を提供しようという試みである。

Naumburg(1966)は力動的芸術療法と美術教育の相違について「美術教育は芸術療法とは反対に美術表現技術を向上させ、拡大しようとする意識的教育法である」と指摘している。通級指導学級では個々の生徒の状態に合わせた指導目標が設定されている。美術の授業では、生徒が安心して表現の出来る「場」を提供し、生徒のありのままの表現が尊重され、表現技術の向上は二次的な目標となる。従って芸術療法の本質を取り入れた関わりが可能である。本論では実践事例を通じ集団場面における造形表現活動の持つ特質を検討し、治療技法としての活用法を明らかにしたい。

#### 学級の概要

S学級（不登校生徒を対象とする情緒障害学級）は区内の不登校生徒が在籍に籍を置き通級する通級指導学級である。2クラス（定員20名。担任教諭3名）で、個々の生徒の状況に合わせた対応がなされ、生徒が安心して居られる場を作ることが心がけられ、出入り自由な雰囲気がある。S学級の生徒に対する美術の授業の実践から心理的援助技法としての造形表現活動が治療的意味を持つための要因を検討する。

#### 2. 方法

(1)期間：X年度1年間（実施内容についてはX-2年4月からを含む）週1回2時間、計37回実施。（年間授業表参照）

(2)対象者：区立中学通級指導学級に通級する生徒（随時生徒が入級し人数が増え、20名。一斉授業）

(3)手続き：美術の授業を実践し「関与しな

がらの観察」(Sullivan 1940)を行う。

造形表現活動を通じて心情を豊かにし、表現する喜びを体験することを目標とし、生徒の状況に応じ個別の目標を設定した。学事の流れ、学級と生徒の状況に合わせ、主に生徒の自己表出を目的とする個人作品と、主に生徒の相互交流を目的とする共同制作のテーマを設定し造形表現を実施した。

個人作品は、個々の生徒が個人で制作する作品で、個別作品（各生徒が自分で選択し、自分のペースで制作する作品）と共通作品（共通テーマの作品で、巧拙を意識しないテーマを設定し、短時間で完成し、完成の喜びが得られるもの）を実施した。共同制作は学級全体で一つの作品を制作する。同じテーマで個別に制作したものを貼り合わせるものと、皆で協力して制作するものがある。2学期は文化祭に向け「ちぎり絵」を制作した。

(4)資料の収集方法：①生徒の作品を味わうことに加え作品を分析理解する。②生徒の行動、学級での様子を観察し授業記録の作成をする。③学級担任との話し合い、アンケート、インタビュー⑤各学期末にバウムテストを実施。

#### 3. 結果

年間37回の授業を実施。実施内容および生徒の参加状況については、年間授業表を参照。事例:A君(中学3年男子)

##### (1)入級までの経緯

中2、2学期より不登校と学習障害の疑いで教育センターに週1回通う。学級担任に虚言を言うことがあった。3年次4月より本学級入級。美術の初回では「空手の有段者で週2回、道場に通っている」とA君から話しかけてくる。背が高く体格が良いが人なつこい笑顔を浮かべ

る。生活習慣病で通院中。

(2)事例の経過 X年度をA君の変容に即して3期に分けて記述する。(表:事例A君参照)

①第1期 4月～11月初(#1～#21) 表現活動を楽しみクラスのムードメイカーとなる

入級初回時A君は空間的認知が苦手の様子であったが、丁寧に作業方法を説明すると、積極的に工夫し制作した。自分から質問しにくいのだろうと推察し、導入時説明を配慮することにする。『線と色を使って表現しよう』では、説明文に詩を書く。「在籍校の国語の時間は何もしなかった」と担任より伺う。A君のペースを大切に、A君の潜在的力が充分に発揮できるよう援助して行こうと考えた。

2学期は文化祭(11月初)に向け、個人作品アートグラスと共同制作のちぎり絵を制作。文化祭に出品したアートグラスは細部まで細かく仕上げられ、教頭先生、学級担任からのフィードバックがA君の自信につながり、作品を見た先生方がA君の潜在能力を再認識された。

『ちぎり絵』は文化祭に向けて長期間にわたり取り組む共同制作である。A君は細かい部分の制作を買って出て、自主的に作業をした。作業時に学級内の緊張が高まる場面でも、いらつく友人を包み込むように接し、女子を含め学級のつなぎ役として、全体の緊張を和らげていた。

②第2期 11月初旬～1月初旬(#22～#28)

表現活動で感情を表出

11月半ば、授業前に当日放課後の入試面接練習を知る。始業時より木を彫り、貫通させて「すっきりした」と言う。普段、苛立ちや攻撃性を見せないA君の初めての行動であった。フラストレーションを感じた時、時に思いもかけない行動をとることがある。適切な手段で表現

することがA君の次の課題である。

③第3期 1月中旬～卒業時(#29～#37) 作品や言語で自己を見つめた

作業時に高校入試を控えた心境を語る。自分の気持ちを表現する「色彩コラージュ」では、高校に不合格で暗い気持ちを作品に表現し、現在の心境を語る。バウムは描いた木を見て「寂しい木。早く以前のような元気な木が描けるようになりたい」と自分を客観視した。その後、第2志望校に合格し、順調な高校生活を送る。

考察

A君は在籍校では持てる力を充分に発揮できずにいた。安心できる場でA君のペースで造形表現活動ができるよう心がけた。A君は個人制作の過程で自己を表出し、制作活動を楽しんだ。完成した作品、制作過程を通じ、自らを客観視し自己理解が深まった。制作活動を通して、学級のムードメイカーとしてA君の良さが発揮され、交わされる会話で、互いの交流が深まった。それが、「ありのままの自分」を他者に受け入れられ、さらには「ありのままの自分を自分が受け入れる」事につながった。ありのままの自分が他者に受け入れられることが自己受容につながることは C.Rogers.(1967)が指摘している。また、Sullivan(1940,1953),青木(1996,2001) 青木ら(1990)の指摘する同年齢の友人を持つことから得られる共感的理解が「共有できる存在としての他者」を意識し、自己中心的な世界からの成長の契機となっていると考える。作品および制作過程からその時点でのA君の気持ち、成長、課題、生徒間の力動が理解され、それを学級担任と話し合うことで互いの生徒理解が深まり、適切な援助へとつながった。





### Ⅲ. 研究2「重複聴覚障害者に対する心理的援助技法としての造形表現活動」

#### 1. 問題と目的

聴覚障害はコミュニケーション障害とも言われる(村瀬 2000)。重複聴覚障害者とは、聴覚障害の他に知的障害や視覚障害、肢体障害、精神障害を合わせ有する状態を言い、聴覚障害から生じるコミュニケーション障害に加え、さまざまな他の障害の状態により、コミュニケーション方法は個別的である。これらの人々に対する心理的援助の研究として村瀬・並木ら(2000)、並木(2002)、村瀬・並木ら(2004)、石倉(2004)、並木(2005)がある。

大正大学カウンセリング研究所ではX-5年より、ろう重複障害者就労施設(以下、B施設と表記)の要請で入所者に対する心理的援助を開始した。B施設の入所対象者は、重度の聴覚障害を持ち、その他の重複する障害(重度または最重度の知的障害を併せ持つ人が全体の8割を占め、視覚障害、肢体不自由、診断名として統合失調症、うつ病、てんかん、行為障害、自閉症等)のために、就労や社会生活に困難を持つ人々(現在50余名)である。入所者の年齢は18歳から70代と幅広く、平均年齢はおおよそ40歳である。入所者のコミュニケーション手段として、手話でのやりとりが可能な方は2割弱で限られた手話や指文字、独自の身振り、筆談等個々人の状況により異なる。心理的援助として個別面接や小集団に対する取り組みを行う過程で、自然発生的に自分のペースで作品を制作したり、他の人が制作するのを眺めながらその場にいる、出入り自由な造形表現活動グループが生まれた。本研究ではB施設の入所者に対する造形表現活動の実践から心理的援助

技法としての造形表現活動が治療的意味を持つ要因を検討する。

#### 2. 方法

- (1)期間: X年12月よりX+2年3月
- (2)対象者: B施設の入所者で造形表現活動に参加された方。
- (3)手続き: 造形表現活動を実施し「関与しなごらの観察」(Sullivan 1940)を行う。

出入り自由な造形表現活動を通して、①日常の作業から離れた「非日常」を体験する時間を持つ、②表現することの喜びを体験し、自ら主体的に過ごす時間となること、③制作の有無や巧拙に関わらず表現や作品大切にされる体験を通し自分自身が大切にされる体験をすること、④作品を通して他者との交流の契機とすることを目標に、入所者の状況に応じ個別の目標を設定した。それまで月2~4回、描画道具や折り紙等を準備した出入り自由なグループが実施されていた。その中で月1回を、①生活に潤いをもたらすこと、②予め素材を準備し選択してもらうことで制作への抵抗を少なくし、主体的に関わる契機とする、③共通テーマによる相互交流の契機を目的として季節感のあるテーマを設定し月1回の活動を実施した(現在6回、今後9回を予定。活動記録参照)。

- (4)資料の収集方法: ①作品を味わうことに加え作品を分析理解する。②入所者・グループの様子を観察し、実践記録を作成する。③作品および制作プロセスを通じた入所者の理解を事例を通して検討する。④職員との合同カンファレンス・インタビュー

#### 3. 結果

- (1)グループの構造

活動記録

◎三種種別に参加 ○=参加 ☆=以前受け身だったが主役的に取り組む等顕著な変化 ☆=自由な描画・造形 ●=「終わりの会」出席

回数	1月28日	2月25日	3月25日	4月22日	5月27日
テーマ	クワガタの産卵	「おひさま」作り 「おひさま」作り	和紙のまじり絵 和紙のまじり絵	「誰の尻尾」 「誰の尻尾」	「蝶の花がたつむり」 「蝶の花がたつむり」
内容	クワガタの産卵の様子を写真で撮影し、その様子からクワガタの産卵の仕組みを推察し、クワガタの産卵の様子を絵で表現する。	色鉛筆で「おひさま」を作り、その様子から「おひさま」の仕組みを推察し、クワガタの産卵の様子を絵で表現する。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。
活動の様子	クワガタの産卵の様子を写真で撮影し、その様子からクワガタの産卵の仕組みを推察し、クワガタの産卵の様子を絵で表現する。	色鉛筆で「おひさま」を作り、その様子から「おひさま」の仕組みを推察し、クワガタの産卵の様子を絵で表現する。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。
子どもの活動	クワガタの産卵の様子を写真で撮影し、その様子からクワガタの産卵の仕組みを推察し、クワガタの産卵の様子を絵で表現する。	色鉛筆で「おひさま」を作り、その様子から「おひさま」の仕組みを推察し、クワガタの産卵の様子を絵で表現する。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。
作品例作	クワガタの産卵の様子を写真で撮影し、その様子からクワガタの産卵の仕組みを推察し、クワガタの産卵の様子を絵で表現する。	色鉛筆で「おひさま」を作り、その様子から「おひさま」の仕組みを推察し、クワガタの産卵の様子を絵で表現する。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。
時間	1:00~3:25	1:30~3:30	2:00~3:30	1:30~3:15	1:30~3:15
場所	芸術室	芸術室	芸術室	芸術室	芸術室
参加人数	14名	22名	14名	15名	18名
参加の様子	クワガタの産卵の様子を写真で撮影し、その様子からクワガタの産卵の仕組みを推察し、クワガタの産卵の様子を絵で表現する。	色鉛筆で「おひさま」を作り、その様子から「おひさま」の仕組みを推察し、クワガタの産卵の様子を絵で表現する。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。
性別	1 A 男 1 2 B 女 3 3 C 女 5 4 D 女 5 5 E 女 3 6 F 女 3 7 G 女 4 8 H 女 1 9 I 女 2 10 J 女 2 11 K 女 2 12 L 女 0 13 M 女 0 14 N 女 0 15 O 女 0 16 P 女 0 17 Q 女 0 18 R 女 0 19 S 女 0	1 A 男 1 2 B 女 2 3 C 女 3 4 D 女 3 5 E 女 2 6 F 女 2 7 G 女 2 8 H 女 2 9 I 女 2 10 J 女 2 11 K 女 2 12 L 女 2 13 M 女 2 14 N 女 2 15 O 女 2 16 P 女 2 17 Q 女 2 18 R 女 2 19 S 女 2	1 A 男 1 2 B 女 2 3 C 女 3 4 D 女 3 5 E 女 2 6 F 女 2 7 G 女 2 8 H 女 2 9 I 女 2 10 J 女 2 11 K 女 2 12 L 女 2 13 M 女 2 14 N 女 2 15 O 女 2 16 P 女 2 17 Q 女 2 18 R 女 2 19 S 女 2	1 A 男 1 2 B 女 2 3 C 女 3 4 D 女 3 5 E 女 2 6 F 女 2 7 G 女 2 8 H 女 2 9 I 女 2 10 J 女 2 11 K 女 2 12 L 女 2 13 M 女 2 14 N 女 2 15 O 女 2 16 P 女 2 17 Q 女 2 18 R 女 2 19 S 女 2	1 A 男 1 2 B 女 2 3 C 女 3 4 D 女 3 5 E 女 2 6 F 女 2 7 G 女 2 8 H 女 2 9 I 女 2 10 J 女 2 11 K 女 2 12 L 女 2 13 M 女 2 14 N 女 2 15 O 女 2 16 P 女 2 17 Q 女 2 18 R 女 2 19 S 女 2
参加者	1 A 男 1 2 B 女 3 3 C 女 5 4 D 女 5 5 E 女 3 6 F 女 3 7 G 女 4 8 H 女 1 9 I 女 2 10 J 女 2 11 K 女 2 12 L 女 0 13 M 女 0 14 N 女 0 15 O 女 0 16 P 女 0 17 Q 女 0 18 R 女 0 19 S 女 0	1 A 男 1 2 B 女 2 3 C 女 3 4 D 女 3 5 E 女 2 6 F 女 2 7 G 女 2 8 H 女 2 9 I 女 2 10 J 女 2 11 K 女 2 12 L 女 2 13 M 女 2 14 N 女 2 15 O 女 2 16 P 女 2 17 Q 女 2 18 R 女 2 19 S 女 2	1 A 男 1 2 B 女 2 3 C 女 3 4 D 女 3 5 E 女 2 6 F 女 2 7 G 女 2 8 H 女 2 9 I 女 2 10 J 女 2 11 K 女 2 12 L 女 2 13 M 女 2 14 N 女 2 15 O 女 2 16 P 女 2 17 Q 女 2 18 R 女 2 19 S 女 2	1 A 男 1 2 B 女 2 3 C 女 3 4 D 女 3 5 E 女 2 6 F 女 2 7 G 女 2 8 H 女 2 9 I 女 2 10 J 女 2 11 K 女 2 12 L 女 2 13 M 女 2 14 N 女 2 15 O 女 2 16 P 女 2 17 Q 女 2 18 R 女 2 19 S 女 2	1 A 男 1 2 B 女 2 3 C 女 3 4 D 女 3 5 E 女 2 6 F 女 2 7 G 女 2 8 H 女 2 9 I 女 2 10 J 女 2 11 K 女 2 12 L 女 2 13 M 女 2 14 N 女 2 15 O 女 2 16 P 女 2 17 Q 女 2 18 R 女 2 19 S 女 2
作品	クワガタの産卵の様子を写真で撮影し、その様子からクワガタの産卵の仕組みを推察し、クワガタの産卵の様子を絵で表現する。	色鉛筆で「おひさま」を作り、その様子から「おひさま」の仕組みを推察し、クワガタの産卵の様子を絵で表現する。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。	和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学び、和紙のまじり絵の作り方を学ぶ。

日時は作業が休みの金曜日午後に設定し、場所は会議室および玄関ホール（当日空いている場所）とした。会議室は個人の机と椅子を準備し、玄関ホールはソファが設置されており、長机3つと絨毯を準備した。実施に際しては、①テーマや活動内容を視覚的に図示し選択可能とする、②貼る・塗る等、単純な手順で巧拙に関わらず達成感があり、発展性のある課題を手作りで一人分ずつ小分けに準備することとした。各回とも、共通テーマの素材の他に画用紙・色鉛筆・クーピーペン等描画素材、折り紙、糊・ハサミ等を準備した。作品完成後、作品を持った所をデジカメで撮影し、その場で写った映像を再生し参加者にお見せした。

## (2)グループの経過

6回の内1度でも参加した入所者は35名であった。各回の参加者と活動内容については別表、活動記録にまとめた。参加者の活動の様子については共に援助活動を行った実習生、共同研究者と協議の上、記述した。

グループ開始当初、筆者は手話もほとんどできず身振りと図示により参加者の方と対話。参加者が根気よく意志を伝えて下さり、用意した素材を元に制作に集中され、表現への要求の大きさを実感した。ハサミを使用できるのはごく一部の方で、経験不足や指先の巧緻性が不足している参加者も多く、素材の工夫やその場での参加者の状況に合わせた対応が必要であった。

## (3)事例

### ①Cさん(30代男性。知的障害・自閉。左手マヒ)

X年9月～11月の活動では、援助者に似顔絵や絵を描いてもらう等、受動的な関わりを楽しんでいた。第1回では、初めて主体的に制作。Cさんが糊をつけた紙を筆者がCさんの指示

で紙に置きCさんが手で押さえるという共同作業を行い、一つ作業が終了する度笑顔でOKサインを交換しあう。援助員さんの「今日帰宅する際、お母さんへのおみやげ出来たね」の手話に満面の笑顔。完成作品を持ち積極的に写真撮影に応じ自由描画も3枚描く。第2回は、自分の好きな女性アナウンサーの写真を持参しコラージュを行う。第5回は、用紙、糊の容器等をテープで机に固定することほぼ一人で塗り絵とコラージュの鯉のぼりを制作し、名前を記入する。展示も積極的に行い、筆者と笑顔でOKサインを交わし完成を喜ぶ。他の参加者がCさんの似顔絵を描いたのを笑顔で眺める。第6回では終始積極的に活動し、完成した作品を積極的に援助者に見せ、OKサインを出す。制作枚数も6枚とこれまでで一番多く、作品内容も形が整い作業が丁寧となる。この日Cさんを迎えに来た母親が「色も自分で選んだのですか？宝物です」と喜ばれた。

### ②Dさん(30代男性。知的障害・自閉)

X年9月～11月の活動には、1度だけ参加。描画を行うも終始中空を見、視線合わず。上半身を回し声をあげ続ける行動があった。第2回に参加。挨拶をしても視線が合わなかったが、コラージュ素材を並べて、やり方を手真似で示すと自然に取り組む。鳥のコラージュを完成後、折り紙のコラージュも手順を示すと自分から貼り始めた。作業途中より視線会い、写真撮影し完成を共に喜ぶ。第3回は雛のコラージュ完成後自ら作品を展示し、手を叩き声を出し筆者と喜び合う。塗り絵は、1色でまばらに彩色し、塗り分けが出来ない。貼る課題に意欲的な事を考え、折り紙のコラージュを示すと主体的に取り組む。作業中、身体を揺すり声をあげて喜ぶ。



終始、視線合うようになり、手順教えて欲しいと筆者の手を引き自ら要求を示すようになった。第6回は、和紙を貼る輪郭を鉛筆で囲い、和紙を並べて見せると、手順を理解し一人で取り組む。作業途中、分からない部分で作業が止まるが、適切な示唆があると、制作を続けた。作品が構造的になり、貼り方も丁寧となる。写真撮影時、最初から目線合う。周囲の人の作品を眺め、終わりの会も参加する。

#### 考察

全て独力で行う描画や造形には抵抗感がある参加者でも、素材の工夫やスモールステップでの関わり等、適切な手がかりや援助が得られると造形表現に主体的に取り組む事が可能である。その際援助者がその場での参加者の状態やニーズを的確に把握し、応じることが必要である。また、共に作業することや完成した作品を共に味わい完成を喜ぶ際、参加者が表現するもの（表情、身振り、仕草、発声等）や作品に援助者が自身の精一杯の表現様式（視線、身振り、表情、片言の手話）で応じ活動を共有する事が繰り返された。ここでのコミュニケーションは、並木・村瀬が指摘する「Stern(1985)の言う情動調律や河崎(2000)の『互いに響き合う体験』につながる。母親が赤ちゃんの仕草や発声に呼吸を合わせ、応じることが『表現すれば呼応する対象があること』を伝える」ことと考える。手話や指文字での表現も限られるCさんやDさんにとり、作品制作が自己表出や「表現する楽しさ」を実感する契機となった。また、作品を展示することや写真撮影することで、自分の活動を「目に見える形」で実感することにつながった。小集団での活動では、互いの作品や作業を眺める事が可能で、制作の手がかりや

活動への契機が得やすい。また、展示された自分の作品を援助者や仲間に見せる、仲間の作品を見る等、交流の契機となった。

活動での変化は、この場だけに起因するものではなく、日々の施設での生活やこれまでのグループ活動が根底にあることは言うまでもない。また、援助者の手話や、参加者個別のコミュニケーション手段や背景に関する理解が未熟で参加者のニーズ十分に把握できずにいる場合もある。活動を継続する中でこの点を含め事例を考察していきたい。

#### IV. 総合考察 小集団における心理的援助技法としての造形表現活動の治療的意味と活用法について

##### 1. 作品制作について

個人作品については、①自己を表出する契機となる、②作品に表現することによりカタルシス効果が得られる、③自己を見つめ、客観視し自己理解が進む、④他者との交流の契機となる、⑤参加者理解の為のアセスメントツールとなることが理解された。共同制作については個人作品制作時に見られた意味に加え、①互いの交流の契機となる、②参加者の自発的な活動と集団の一員としての自覚が促された。

##### 2. 場の持つ意味

①参加者が制作の場を「安心して過ごせる時間」と感じており、その要因はありのままの自分で居られ、制作の有無や作品の巧拙にかかわらず、自分の表現が受け入れられる場であったことと考える。②作業中や作品完成時における援助者とのやりとりが「表現がうけいれた」「かけがいのない私」を意識する契機となった。③作業をしながら自然と交わされる対話が互いを理解し、自分自身を見つめる契機となった。

### 3. 関わり方の留意点

①参加者がその場にいるだけで尊重されていると感じられ、安心して表現のできる場を作ること、参加者の自由な造形表現活動、発言、相互交流の場を提供し、個々の参加者の状態に合わせた対応を心がける。援助者自身がその活動の意義や目的を考えつつ、一方で参加者の状態に合わせて予定を柔軟に変更すること、援助者自身が参加者と共に活動を楽しむゆとりを持つこと。②その時々々の参加者の状態を見立て、参加者のニーズに応じた関わりをし、現時点での参加者を受け入れることと成長促進的な関わりとのバランスをとること。③素材やテーマの持つ意味や特性を熟慮し、参加者の状態、季節や学事・行事の流れを考慮しテーマを設定する。④作品を生活の空間に展示することで参加者

が居場所感を得、自身を深め、他者との交流が促進された。

### 4. 他職種との連携

学級担任や施設の職員から普段の参加者の様子を伺うことが参加者理解に欠かせなかった。制作時や作品から感じられた参加者の気持ちや現時点での成長や課題、参加者間の力動を他職種の方と話し合うことで、互いの参加者炉位階が深まり、参加者の援助へとつながった。

以上、1~4から、心理療法の本質を大切にしたい小集団での造形表現活動は心理的援助につながる。

※本研究にご協力頂いた生徒の皆さん、入所者の皆様、保護者の皆様、先生方、援助員の方、実習生に深謝致します。

#### 参考文献・引用文献

- 青木省三 1996 思春期こころのいる場所 岩波書店  
青木省三 2001 思春期の心の臨床 金剛出版  
青木省三ら 1990 思春期神経症の治療における「たまり場」の意義-関係性の埋められる培地として- 集団精神療法 6 (2); 157-161  
飯森真樹雄 2000 芸術療法の適応と注意点 こころの科学 92;24-30 日本評論社  
石倉陽子 2004 施設入所している重複聴覚障害者への心理的援助の試み-出入り自由のグループにおける取り組み-明治安田こころの健康財団研究助成論文集第3号  
河崎佳子 2000 静かな叫び-不就労ろう青年と関わり続けた9年間 発達 81号; 1-64  
近藤喬一、鈴木純一編 (1999): 集団精神療法ハンドブック、金剛出版  
文部科学省不登校問題に関する調査研究会議 2003 今後の不登校のあり方について (報告)  
村瀬嘉代子 1991 心理臨床におけるシンボル 臨床描画研究 6 ; 31-46  
村瀬嘉代子 子どもの心にあうとき-心理療法の背景と技法- 金剛出版  
村瀬嘉代子 2004 聴覚障害者に対する統合的アプローチ-理論とその実践の展開-平成13~15年度科学研究費補助基金基盤研究(C)(2)研究成果報告書  
村瀬嘉代子 2005 生きられた時間を求めて 臨床描画研究 20 ; 2-10  
村瀬嘉代子ら 2000 居場所を失った思春期・青年期の人々への統合的アプローチ 心理臨床学研究 Vol.18.No3-221-232  
中井久夫 1976 “芸術療法”の有益性と要注意点 芸術療法 7 ;55-61  
並木桂・村瀬嘉代子ほか 2000 聴覚障害者に対する統合的アプローチ-ろう重複聴覚障害者労働施設での取り組み- 明治安田生命社会事業団研究助成論文集第36号  
並木桂 2002 重複聴覚障害者に対する統合的アプローチ第1報 大正大学カウンセリング研究所紀要第25号  
並木桂・村瀬嘉代子 2003 重複聴覚障害者への心理的援助-ろう重複聴覚障害者施設における統合的アプローチ 心理臨床学研究 Vol.20.No-588-600  
並木桂 2005 重複聴覚障害者施設における描画臨床 臨床描画研究 20;40-55  
Naumburg Margaret *Dynamically oriented art therapy: its principles and practice*. New York Grune&Staratton. 1996 中井久夫・内藤あかね (訳) 力動指向的芸術療法 金剛出版  
Rogers,C.R. 1967 *The complete works of C.R.Rogers* 8 伊藤博 (編訳) 1967 ロジャーズ全集 8 パースナリティ理論 岩崎学術出版社  
Stern,D.N.(1985):*The Interpersonal World of the Infant:A view from Psychoanalysis and Development*. Basic Books, 小此木啓吾・丸田俊彦監訳 (1989・1991): 乳幼児の対人世界 (理論編・臨床編). 岩崎学術出版社  
Sullivan,H.S 1940 *Concept of modern psychichiatry; The first William Alanson White Memorial Lectures*. 中井久夫・山口隆 (訳) 1976 現代精神医学の概念 みすず書房  
Sullivan,H.S 1953 *The interpersonal theory of psychiatry Edited by Helen Swick perry, Mary Ladd Cavel*.New York:Norton. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敏三・鎌幹八郎 (訳) 1990 精神医学は対人関係である みすず書房  
齋藤ユリ 2005 学校心理臨床と集団描画療法 臨床描画研究 20;56-72  
齋藤ユリ 2004 不登校生徒に対する心理的援助技法としての造形表現活動 大正大学人間学研究所修士論文 未公開  
関則雄 2000 集団絵画療法 こころの科学 92;43-49 日本評論社  
高江洲義英 1998 集団精神療法と芸術療法 芸術療法 1 理論編 岩崎学術出版社  
高江洲義英 2000 イメージ表現の心理学-芸術療法とそれを包む場- こころの科学 92;18-23 日本評論社  
高橋雅春・高橋依子 1986 樹木画テスト 文教出版  
山中康裕 1999 心理臨床と表現療法 金剛出版